

## 当院での外来輸血後に発症した遅発性溶血性輸血副反応（DHTR）の一症例

◎川野 真央<sup>1)</sup>、藤井 明美<sup>1)</sup>、高崎 理那<sup>1)</sup>、藤山 真希<sup>1)</sup>、小川 和子<sup>1)</sup>  
県立広島病院<sup>1)</sup>

【はじめに】遅発性溶血性輸血副反応（DHTR）は輸血後24時間以降に発症する輸血副反応であり、その原因の多くは不規則同種抗体（IgG型）による二次免疫応答によるものである。今回、当院での外来輸血施行後にDHTRを発症した症例を経験したので報告する。【症例】60代、女性。既往歴：くも膜下出血。妊娠歴、輸血歴：あり。現病歴：1ヶ月続く微熱のため近医受診。血液検査結果にて貧血を認め精査加療目的にて当院紹介受診。来院時の血液検査でHb 3.4g/dLと高度貧血を認めたため、精査を行うとともに同日および翌日にIrRBC-LR2を2本ずつ外来にて輸血施行。輸血後はHb 9.7g/dLまで上昇し鉄剤投与にて経過観察。輸血後10日目に38.8度の発熱、翌日前医受診、血液検査にて貧血と黄疸を認めたため再度紹介受診、入院となる。

【輸血検査結果】ABO・RhD血液型：A型RhD陽性。初回輸血時の不規則抗体スクリーニング陰性。入院時：不規則抗体スクリーニング陽性、直接抗グロブリン試験陽性、不規則抗体同定検査にて抗Jk<sup>a</sup>、抗C、抗e同定、赤血球溶解液からは抗Jk<sup>a</sup>が検出された。輸血した4本の製剤は全て

対応抗原陽性であった。【臨床経過】入院時血液検査から溶血所見を認め、入院3日目Hb 6.0g/dLにてIrRBC-LR2を1本輸血。入院11日目にHb 9.3g/dLと軽快退院した。【考察】本症例は当院での初回輸血時には不規則抗体スクリーニング陰性であり交差適合試験陰性の血液製剤を輸血したにも関わらず輸血後10日で溶血性副反応を認めた。妊娠歴があり約3年前の輸血歴が確認されたことから、過去に産生されていた抗体が当院での初回輸血時には検出感度以下になっており二次免疫応答を引き起こした可能性が高いと考えられる。【まとめ】DHTRは有意な臨床症状を認めないことが多いが、今回明らかな臨床症状を呈するDHTRを経験した。DHTRを防止することは困難であるが、検査は輸血前72時間以内に採血された血液を用い自己対照を実施する、過去の不規則抗体検出歴の把握および不規則抗体カードの患者携帯などの対策が考えられる。現在、更なる安全な輸血療法を目指し「輸血関連情報カード」の採用および運用について輸血療法委員会で検討中である。連絡先：082-254-1818（内線1332）